

神奈川の古俳人

—小田原から出た巨匠 岩波午心—

内田 巖仁

はじめに

神奈川県立図書館（以下「当館」という）では、2010年5月から2012年3月まで約2年間にわたり新館4階のかながわ資料室で、神奈川にゆかりのある江戸時代の俳人を地域ごとに紹介する「かながわの古俳人」を次のように展示した。

- 第一回 横浜：美濃口春鴻、四方庵澧水。
- 第二回 三浦・鎌倉（江ノ島を含む）：梅沢梅豊、鈴木呉雪。
- 第三回 高座郡：川上豊女、阿部石年。
- 第四回 愛甲郡：蟹殿洞々、都不年和尚。
- 第五回 足柄上郡・津久井郡：遠藤故岨。
- 第六回 川崎：老人亭宝水、寥和堂花城。
- 第七回 中郡（鳴立庵歴代庵主）：一世庵主から十世庵主まで。
- 第八回 小田原：岩波午心、円城寺嵐窓。

主として『神奈川古俳人展望』を参考に、俳人たちの調査を行い、当館収蔵の特別コレクションの一つである「飯田九一文庫」¹⁾から図書、軸物、一枚もの、短冊、色紙等を紹介した。本稿は、この展示にあたって行った調査をもとに県下の俳諧の概要と大磯鳴立庵の庵主以上に作品を多く収蔵していることが判明した岩波午心（いわなみごしん）を紹介する。小田原俳壇の巨匠と謳われた午心の作品は、図書（句集）2冊、短冊4点、極書1点、色紙7枚、彫像（箱書のみ）1点を収蔵している。

1 江戸時代の神奈川の俳諧系譜

神奈川県下の俳諧は、江戸初期の京都で紙商を営んでいた本名安原正章、俳号貞室（ていしつ）²⁾の選集『玉海集』³⁾（ぎよつかいしゅう）明暦2

年（1656）に、小田原在住⁴⁾の直旨（ちよくし）の三句が入集されていることからみて、芭蕉出現以前から初期古風や談林風のもので行われていたようである。句を挙げてみると、

むまの年にくふや轡のかゝみ餅（巻1 p283）

花軍せはやまふきやおんな武者（巻1 p310）

歌よめと人はせつきの今宵哉（巻3 p347）

である。

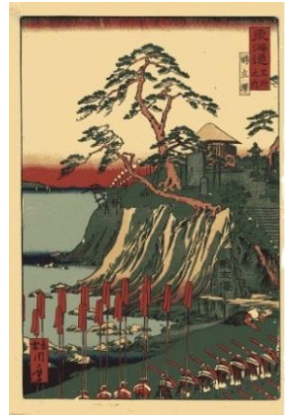
東海道箱根につづく宿場町であり、また小田原藩の城下町として重要な地域であった小田原で俳諧は商人や武家に愛好されていたと考えられる。

1664（寛文4）年、小田原外郎家八代目の次男である崇雪（そうせつ）によって現在の中郡大磯町に草庵「鳴立庵」を結んだ。1695（元禄8）年には、俳人大淀三千風（おおよどのみちかぜ）が荒れ果てていた庵を再興し初代庵主となった。

江戸に松尾芭蕉が出現し、蕉風俳諧と呼ばれる俳諧の新風を興して流行したが、芭蕉の門人は神奈川県下にいなかったようである。芭蕉門下の活躍が拮がり蕉風が江戸近郊に定着し各派に分かれて門人の獲得が活発化した享保の頃「五色墨運動」の時代に入ってから県下でも蕉風の俳諧が盛んになった。

芭蕉の没後、俳諧が大衆化すると遊戯的な点取俳諧となっていた。この点取俳諧は難解な洒落や比喻をもちいた俳諧であったが、平明な蕉風への復帰を主張する『五色墨』1731（享保16）年（飯田九一文庫収蔵）が刊行され「五色墨運動」が始まった。そのメンバーの一人である長水（後の柳居）に入門したのが、後の鳴立庵俳諧の中心となる白井鳥酔（しらいちょうすい）である。県下に鳥酔門が多くなると、相模門人の要請によって、鳥酔は「鳴立庵」を再興して入庵した。

この時代の県下の俳壇では小田原・神奈川などを中心として雪門（せつ



「鳴立沢」
『東海道名所之内』より

もん) と、同じく蕉門其角派の法師風が相模北部を中心に行われていた。

1743 (寛保 3) 年は芭蕉五十回忌にあたり、蕉門各派において追善集が編まれ、供養・建碑の事業が盛んに行われ、蕉門の千那 (せんな) の門人である千梅 (せんばい) も、江戸東名木沢の医王山泉養寺に芭蕉塚を築いた。その千梅の追善集『なつぼうず』1770 (明和 7) 年には藤沢俳壇として千豈 (せんがい) 以下 31 人の名を見ることができる。千豈の後の藤沢俳壇の中心は千珏 (せんかく) であり、鎌倉の安斎仙鳥 (あんざいせんちょう) の追善句集『卯の花くもり』1802 (享和 2) 年にも入集されている。⁵⁾

江戸中期、関東俳壇に新風を興した加舎白雄 (かやしらお) は 1776 (安永 5) 年江戸に春秋庵を開いた。その記念集『春秋稿』1780 (安永 9) 年には、相模の俳人として下飯田 (現：横浜市泉区) の美濃口春鴻 (みのぐちしゅんこう) らの名がある。春鴻は白雄の門人で、江戸期の相模を代表する俳人である。白雄没後、春秋庵門下は分派したが、春鴻は相模俳壇と春秋庵の後見として門人遠藤雉啄 (えんどうちたく) や倉田葛三 (くらたかっさん) を次代に送り出している。この時期の俳人に四方庵澧水 (よもあんほうすい) がいるが、澧水は白雄の没後、春鴻とともに相模俳壇の発展に尽力した人物である。

1793 (寛政 5) 年は芭蕉の百回忌にあたり、各地で追善の行事が催された。鳴立庵には鳥酔没後に杉坂百明 (すぎざかひやくめい)、西奴 (せいぬ)、三浦柴居 (みうらさいきよ) が入り、柴居没後に葛三が継ぎ、相模俳壇に貢献した。葛三の後は雉啄が継ぐが、この頃は相模俳壇が最も盛えた時期であった。

鳴立庵俳壇の最盛期であった頃の歴代庵主の略歴と俳句⁶⁾

一世庵主 大淀三千風 (おおよどみちかぜ) 宝永 4 年没 在庵 13 年

鳴立てなきものを何よぶこどり

二世庵主 大本朱人 (おおもとしゅじん) 享保 18 年没 在庵 27 年

ちり塚にもろしや花の菜大根

三世庵主 白井鳥酔 (しらいちょうすい) 明和 6 年没 在庵 4 年

大島や波に寄せたる雪の舟

四世庵主 杉坂百明（すぎざかひやくめい）天明4年没 在庵16年

西東啼くべき夜なりほととぎす

五世庵主 加舎白雄（かやしらお）寛政3年没 在庵8年

元日や大樹のもとの人ごころ

六世庵主 西奴（せいぬ）寛政5年没 在庵2年

雨すぎて夜さむのからす啼きにけり

七世庵主 三浦柴居（みうらさいきよ）寛政6年没 在庵1年

夜をひと夜おもへばなしが松の露

八世庵主 倉田葛三（くらたかつさん）文政元年没 在庵24年

身の上の夏や蓮の一枚葉

九世庵主 遠藤雉啄（えんどうちたく）天保15年没 在庵27年

心ほど世は経がたくも散る桜

十世庵主 島田立宇（しまだりつう）慶応2年没 在庵23年

月まどかまどかと独り寝ぬ夜かな

また、三浦地方の鈴木呉雪（すずきごせつ）は『俳諧百子規』1788（天明8）年に入集されている。呉雪は、30代から40代に翠園積翠に師事し、芭蕉関係の俳論・句集を筆写し、『蕉門変化集』1803（享和3）年を編集している。

以上がおおまかな県下の俳諧の流れである。

2 神奈川県下の雪門派（雪中庵）

雪門は雪中庵嵐雪（せっちゅうあんらんせつ）一派の呼び名である。服部嵐雪は1654（承応3）年江戸湯島に生まれ、父は下級武士である。嵐雪も父同様に武士となるが1675（延宝3）年頃に芭蕉に入門とすると江戸蕉門の中で地位を築き、武士奉公を辞め、俳諧師として世に立ち雪中庵と号した。そして『其袋』1690（元禄3）年などを出し、彼を祖とする雪門が興された。嵐雪没後、江戸では雪中庵三世の大島蓼太（おおしまりょうた）が安永・天明の頃、江戸俳壇の一大勢力となった。門人三千余人に及んだと言われ、雪中庵の勢力範囲は全国に雪門の繁栄をもたらし、江戸の

周辺都市である小田原の俳壇にも影響を与え、代表的な俳人には芋魁、午心、石髪がいる。

3 小田原の俳壇

小田原の俳壇は元文年間から栄えはじめ寛保、宝暦から明和、寛政、天明にかけて盛んになるが、この時期は小田原城下ばかりでなく、近隣の村にも多数の俳人が現れた。『俳諧夏山伏』1737（元文 2）年を見ると箱根、小田原、酒匂の俳壇から多くの俳人が紹介されている。

天明期になると、小田原には石髪（せきはつ）をはじめ、川勾（二宮町）の素水（そすい）などの雪門蓼太門人がいる。なお、蓼太没後、雪中庵は大島完来（おおしまかんらい）が継いだ。

小田原の天明・寛政・享和期は、蓼太門の石髪の他に、鳴立庵白雄門の俳人も見られる。白雄門には、大久保有隣がいた。有隣は小田原藩の家老大久保又右衛門忠信の俳号である。また、藤沢には田中千梅派の門人千豈、桃雀（とうじゃく）などがある。

化政期の県下の俳壇は鳴立庵派と雪門派の二つの流派が相對していた。県内の地域の殆どが鳴立庵派であったが小田原は雪門派が最盛期を迎える。

当時の小田原俳壇には、蓼太派の岩波午心と同じく雪門六花苑派の円城寺嵐窓（えんじょうじらんそう）が出たからである。この二人は小田原俳壇が生んだ巨匠といえる。

4 岩波午心について

岩波午心は、市町村史や研究資料などに「生年不詳」と記述されているものが多いが、おそらく 1750 年代（宝暦の頃）の生まれと思われる。これは午心が師事した蓼太が、1718（享保 3）年の生まれであること、同門で後に師とした大島完来が 1748（寛延元）年生まれであること、午心の弟子鴨北元（かもほくげん）が 1776（安永 5）年生まれで、午心翁と記述していることから 20 から 30 歳年齢が離れていると思われること。それらから推定して完来より少し後の 1750 年代の生まれであると推測される。また、

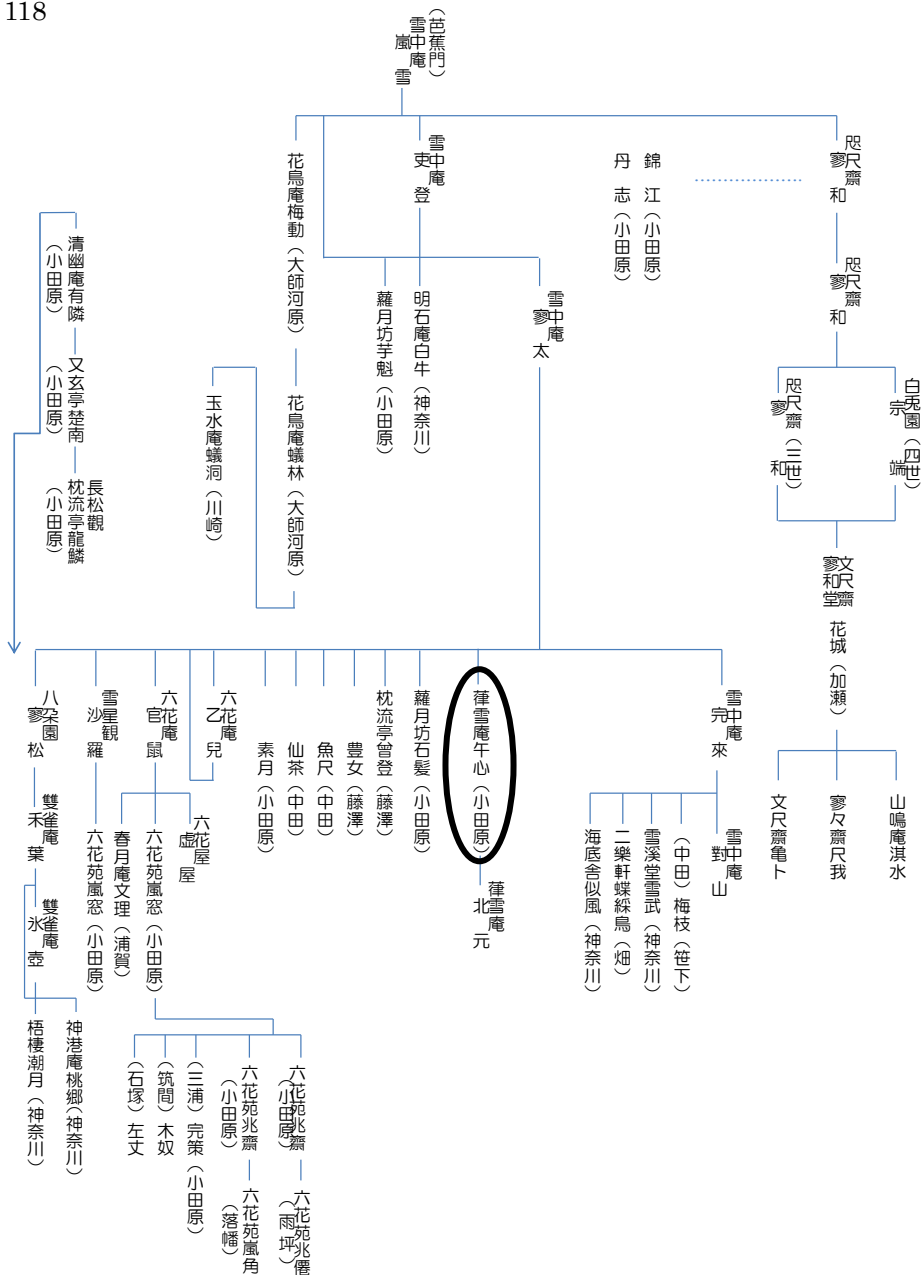


圖 1 雪門派系譜⁷⁾

出身地についても明らかではない。『俳諧大辞典』では「小田原の人」、『角川日本姓氏歴史人物大辞典』や『俳諧人名辞典』では「小田原に生れる」と記述され、また、飯田九一編『小田原俳壇史』でも「小田原の生まれ」と記述されている。しかし、調査した結果、午心は小田原の生まれではないのではないかと疑問が生じた。まず、正式な本名に関する記述が一切残されていないこと。また、小田原の生家の所在も示されておらず、身分も武士だったのか商人だったのか分かっていないこと。そして、江戸に移ってから、再び小田原には戻らず、墓は江戸深川にあることから、小田原で生まれたのではなく、小田原で活躍した俳人ではないかと思われる。

午心は石髪を通して雪門派の俳諧を学んだ。蓼太の没後は、雪中庵四世完来に師事する。号は山花人と称したが、1788（天明8）年頃午心と改めた⁸⁾。

午心は小田原で名を成してから、1801（享和元）年には江戸に移り、浜町河岸の嵐雪柳の辺りに住み、柳下とも号し、庵号を葎雪庵（りっせつあん）と称した。三千人余という門人を擁したという蓼太の高弟の一人であり、名声があったにもかかわらず、俳諧一筋の生涯を送った。午心は、1817（文化14）年1月21日没した。墓は江戸深川要津寺にあり、戒名は「寛量午心居士」である。

辞世の句が門人北元によって編まれた追悼集『錦袋集』⁹⁾に紹介されている。

鶯をなつかしい鳥とおもふ春

花の春十人並となりけり

さらに、午心の清貧を称える句を載せ、「隠者の最後はかくあるべきか」と記している。

死に跡の一文もなし実や花

この他に妻志つ女や師完来をはじめ、午心の多くの門人たちの追悼句が掲載されている。

著作集は、



図2 「芭蕉翁桃青居士座像」
彫刻：雪中庵完来
箱書：葎雪庵午心

『探荷集五編』山花午心編 1789（寛政元）年

*（雪中庵完来の判になった前年の句を収録した雪門の選集）

『芳春帖』葎雪庵連中の歳旦・春興帖 1795（寛政7）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1797（寛政9）年

『葎雪庵歳旦帖』1798（寛政10）年

『拔萃』午心編 1801（享和元）年

*（葎雪庵の選句集）

『芳春帖』葎雪庵午心編 1802（享和2）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1805（文化2）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1807（文化4）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1808（文化5）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1814（文化11）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1815（文化12）年

『芳春帖』葎雪庵午心編 1816（文化13）年

『玉田集』『錦袋集』1819（文政2）年

*（葎雪庵午心の遺稿約四百五十句を集録。追善集『錦袋集』と合冊）

『玉田集後編』葎雪庵北元編。 1819（文政2）年

*（午心の句三百を四季に分け収録。）¹⁰⁾

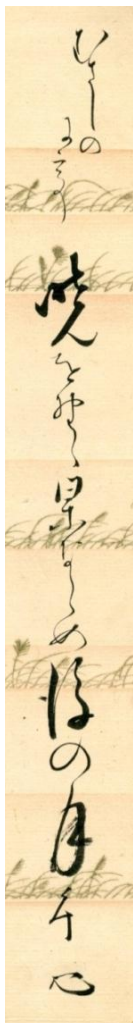
午心の俳書を見るとその句作の多いこと、門人の多かったことなどが窺い知れる。小田原の俳人の中には、他にも江戸に出た人がいたが、中央俳壇で大家となったのは午心のみであり、その意味で午心は小田原俳諧史に特筆すべき俳人である。

午心や嵐窓の活動期が小田原俳壇の最盛期であり、天保以後、俳壇は急速に生色を失ってしまう。その後、小田原俳壇には俳諧史に名を残す俳人が出ていない。やがて明治期に入ると正岡子規が現れ、大磯鳴立庵の庵主も子規系の俳人が勤めるようになった。

4-1 午心の短冊¹¹⁾

4点収蔵。状態がよい3点を紹介する。

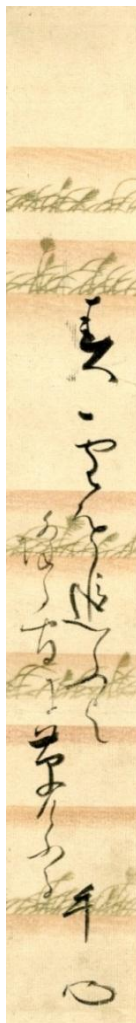
飯田九一は「午心の風調は洵に温雅な句風で彼の筆跡は亦いかにも伸び伸びとした筆底から生まれる嫌味のない名筆」と言っている。



むさしにて

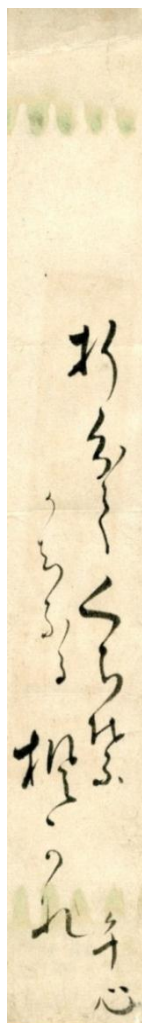
暁を野の果ならめ後の月

図3



春雪を追ふ歟降る間に草けふる

図4



折分てくち葉かちなる楓かな

図5

4-2 午心の色紙¹¹⁾

7点収蔵。現在までに（読み）が確定し状態がよい4点を紹介する。

次第ある空や鶏かねはつ鳥

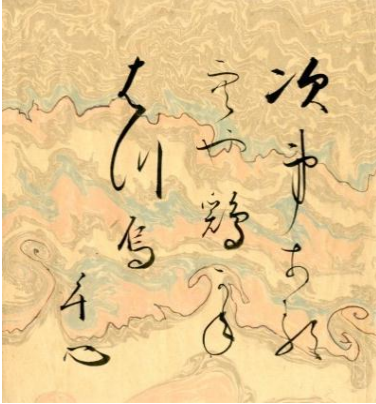


図 6

居通して花のあはれも知る夜哉



図 7

秋のせみをのれを殺す高音かな

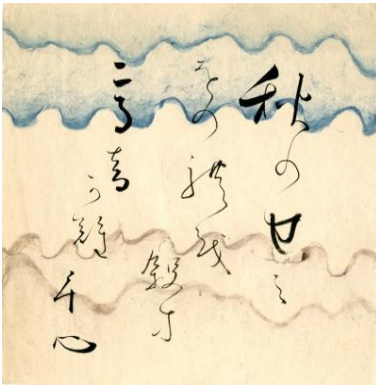


図 8

一里見し雨に逢けりかれ野はら

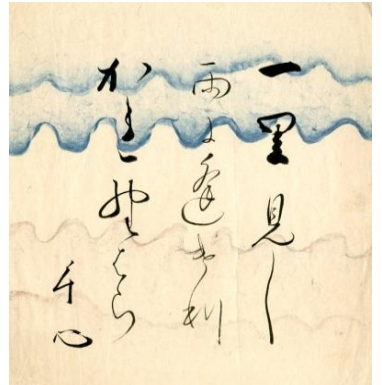


図 9

4-3 午心の極書（鑑定書）¹¹⁾

午心直筆の極書きである。午心が持っている文台は雪中庵の所蔵品だったという鑑定書である。

文台とは書籍・硯箱などをのせる台。また、歌会や連歌・俳諧の会席で、短冊・懐紙などをのせる台のことである¹²⁾。

下記は極書の読み。

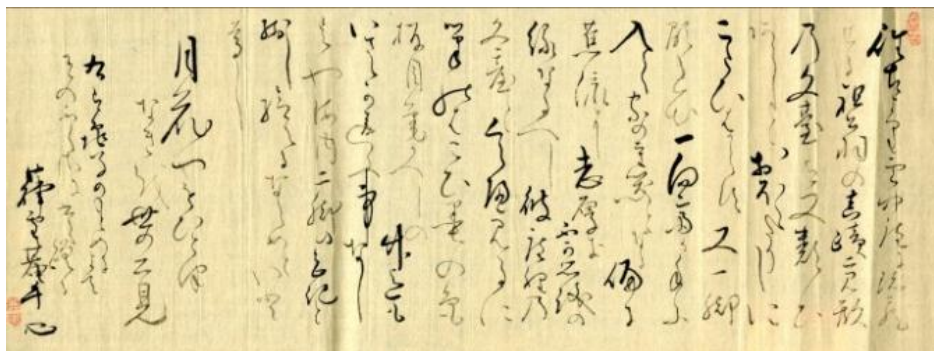


図 10

往古より雪中庵に珍藏せる祖爺の真蹟二見形の文台は又類ひあらしとおほえたりしにこたひはからず又一脚顕れ出一向斉が手に入て家の重器となる偏に蕉流に志厚き不可思議の縁なるへし歎庵裡の文台とくらへ見るに筆のはこひ墨の色板目筆かへしの竹迄もいさゝか違ふ事なし是や海内二脚の念記と残し給えるならめといと尊し

月花 やもひとつ

なきを世の二見

右は亀子のもとめによつて
そのふくさに書て贈る

葎雪菴午心

おわりに

今回の調査で感じたことは、神奈川県下の古俳人を紹介した資料が少ないことである。俳書は多く所蔵しているが、その大部分は個人の句集など

であり、古俳人について記述されている資料はあまり例がなかった。人物・人名辞典や各自治体が刊行した郷土史、市町村史などには紹介されているが、詳細な資料は少なく研究調査されていない地域もあり記述がない市町村史もあった。

特に展示として人物紹介をするときに使う肖像画が入手できなかったことである。江戸期の人物の場合、芭蕉や蕪村などのように有名であれば肖像画は存在するが、県下の古俳人は極めて少なかった。鳴立庵八世庵主葛三は当館収蔵の軸に描かれていた。外に市町村史の口絵にも紹介されていた蟹殿洞々(かにどのとうとう)、美濃口春鴻の肖像画もあった。愛甲郡で紹介した都年和尚(つふねおしょう)の場合は俳句奉納額の裏面に墨で描かれた簡単な肖像画であった。使われているビジュアル資料の多くは墓石や建立された俳句碑などが中心であった。

展示を進めるにあたり資料の保存整理も行った。200年以上経過した一枚ものは未整理のものが多かったので全て畳紙を作成し、人物名と俳句・詠草などに(読み)を附して畳紙内に納めて保存した。

最後に午心をはじめとする地域の古俳人は郷土文化の担い手であり地方文化の牽引者でもあった。彼らは文化の中心地である江戸との交渉役や地方同士を結びつける役割を担っていた。各地域の資料を読むことで古俳人を通して地方文化が発展した足跡を窺い知ることができた。また、五・七・五の17文字に込められた古俳人の投影力や語彙力そして豊かなイメージを持っていたことを強く感じられた。

なお、今回は一司書の行った展示のための調査であり、専門家が行った調査ではないため誤りもあることと思う。誤りについてはご指摘をいただき、次回に生かしたいと思う。

主要参考文献

- 1) 金沢文庫. 神奈川古俳人展望. 金沢文庫, 1953.

大磯鳴立庵関係の古俳人の作品を主に、個人の作品を加えて紹介したもので横浜、

川崎、三浦・鎌倉（江ノ島）、高座郡、中郡、愛甲郡、足柄上・下郡、津久井郡と地域ごとに人物紹介と作品の（読み）を紹介している。俳人は144名、紹介作品は192点である。その内、当館には短冊（122）、軸物（7）一枚もの（27）、色紙（7）を収蔵している。巻末には石井光太郎氏作成の「神奈川古俳書目録稿」が掲載されている。

本稿に紹介した短冊の図・3・4・5と、色紙の図・6・7・8・9までの（読み）は本書から出典した。

- 2) 神奈川県立図書館. 筆蹟と俳書. 神奈川県立図書館, 1961.

1961年3月3日から3月11日まで神奈川県立図書館において開催された展示会の目録である。(1)『神奈川古俳人展望』をもとに展示用として編集された。展示に伴い記念講演会が行われ、講師として飯田九一氏が招かれた。

『筆蹟と俳書』は『国書人名辞典』の参考文献として紹介されている。

- 3) 森あかね. 飯田九一年譜稿－飯田九一文庫より. 神奈川県立図書館紀要 第8号, 2009.
- 4) 神奈川県立図書館. 飯田九一氏旧蔵寄託資料目録(2) 短冊之部. 神奈川県立図書館, 1997.
- 故飯田九一氏が永年にわたって収集されてきた2,500点余りの短冊類。これらは俳句、和歌、漢詩短冊および絵短冊にわたるが、なかでも芭蕉、其角、蕪村等の真跡を含む俳諧関係のコレクションの質の高さは専門の分野でも認められている。また著名人のみならず蕉門、貞門、鳴立庵関係から神奈川県域、明治期、正岡子規関係など各分野の俳人や俳家、文化人などの短冊も網羅して収蔵している。本稿で紹介した極書の図10の（読み）は本書から出典した。
- 5) 神奈川県民部県史編集室. “近世の俳諧”. 神奈川県史各論編3 文化. 神奈川県民部県史編集室, 1980, p. 240-280.
- 6) 中野敬次郎. “近世小田原の俳諧文学”. 神奈川史談第12号. 神奈川県立図書館, 1970, p. 21-37.
- 7) 飯田九一編. “附録小田原俳壇史”. 小田原古今俳句集. 神奈川文庫, 1951, p. 61-91.

その他に、俳人の略歴や俳書の刊行年などは以下の辞典類を参考とした。

- ・伊地知鉄男ほか、俳諧大辞典、明治書院、1957。
- ・松尾靖秋、俳句辞典近世増補版、桜楓社、1982。
- ・尾形仿ほか、俳文学大辞典、角川書店、1995。
- ・市古貞次ほか、国書人名辞典第4巻、岩波書店、1998。
- ・高木蒼梧、俳諧人名辞典、明治書院、1960。
- ・竹内理三、角川日本姓氏歴史人物大辞典14巻、角川書店、1993。

注、引用・参考文献

- 1) 森あかね、飯田九一年譜稿－飯田九一文庫より－、神奈川県立図書館紀要、2009, no. 8, p. 27-42.
神奈川県立図書館編、飯田九一氏旧蔵寄託資料目録(2)短冊之部、神奈川県立図書館、1997。
- 2) 高木蒼梧著、俳諧人名辞典、明治書院、1960, p. 16-18。
- 3) 「玉海集」は『俳書大系(6)貞門俳諧集』に所収されている。
- 4) 「玉海集」の「作者次第不同并句数」に相模国小田原國枝氏とある。(前掲p. 409)
- 5) 木村彦三郎編、「鎌倉の俳人－江戸～明治」、鎌倉近代史資料第6集、鎌倉市中央図書館、1991, p. 12-13。
- 6) 山路閑古、鳴立庵記、「鳴立庵の歴史」、鳴立庵、1974, p. 21-37。
- 7) 神奈川県図書館協会郷土資料編編集委員会編、「俳諧系譜」、神奈川県郷土資料集成3輯俳諧編、神奈川県図書館協会、1959, p. 266。
- 8) 神奈川県民部県史編集室編、神奈川県史各論編3文化、神奈川県民部県史編集室、1980, p. 259-260。
- 9) 「錦袋集」は『玉田集』北元編、1819、と合冊されている。
- 10) 神奈川県図書館協会郷土資料編編集委員会編、「相模俳書目録」、神奈川県郷土資料集成3輯俳諧編、神奈川県図書館協会、1959, p. 282-292。
- 11) 4-1、4-2、4-3は当館の特別コレクションの一つである飯田九一文庫収蔵。
(閲覧ご希望の方は、かながわ資料室にお問い合わせ下さい。)
- 12) 日本大辞典刊行会編、日本国語大辞典第9巻、小学館、1981, p. 570。